第2群 （活動報告）

# サインズ・オブ・セーフティに基づくケースワークを活用した児童虐待対応①
## －家族再統合に向けた当事者主体・解決志向型アプローチによる取り組み－

○中央児童相談所 技術主査 菅野美穂
佐藤啓直，佐々木誠二 北部児童相談所 及川裕 東部児童相談所 小野清香

キーワード：児童虐待対応のケースワーク，当事者主体，ゴールが見える支援

### Ⅰはじめに

平成 27 年度に本県の児童相談所（以下「児相」と言う）（仙台市を除く）が扱った虐待相談は 949 件と過去最高となった。増え続ける相談に対し，効果的なケースワークが必要だが，当事者が望まない介入と支援とを同時に行う難しさを抱え，各自が経験を元に試行錯誤しているのが現状である。

「サインズ・オブ・セーフティ（以下「サインズ」と言う）」は，「子どもの安全」を中心に据えた解決志向の虐待対応ケースワークの枠組みである。当事者を主体としながら，心配なことを明確にし，具体的な安全プランと行程を示すなどの特長がある。サインズを実践する海外の地域では一時保護件数と再虐待率の両方が減少し[1)]，日本でもこの手法を組織的に取り入れた児相では，保護者と児相の関係改善がされたとの報告がある[2)]。本県でも「サインズ」の枠組みによるケースワークを試みたので，その報告を行う。

### Ⅱ方法

平成 27 年 2 月以降「サインズ」の研修会を年 2 回の頻度で実施し，受講した参加者の一部がこの考え方に基づきケースワークを実施した。今回はロールプレイと事例を通じて，一般的な指導型の虐待対応と「サインズ」の枠組みでの対応の差異を明らかにし，その効用について検討する。なお，事例の一部を本質を損なわない程度に改変している。

### Ⅲ活動内容

従来の虐待対応は，保護者の非を指摘し，二度としないと約束させることがあり，保護者から分離した児童は，面会や外泊等で問題がなければ帰すといった不明確な基準になることもあった。一方，「サインズ」ではツールを用い「見える化」して面接を行い，保護者が出来ていることにも目を向ける点が異なる。また，一方的な押し付けではなく，児童の希望を含めた安全プランを保護者主体で考えること，児相が譲れないラインを明示し，安全プランを実行できる見通しをもとに児童を帰す判断をすることが大きな違いであると分かった。

受傷原因が不明な怪我が放置されたため施設入所となり，家庭復帰を目指した事例では，児相として心配なことと保護者ができていることを明確にし，家庭復帰までの道筋を示した。その結果，保護者が自発的に関係機関に相談をし，児童が外泊直前に施設内で怪我をしたことに気づき受診する行動も見られた。このように「サインズ」の実践で，「対立関係から協働関係になる」「膠着状態から解決に向けて動き始める」といったことが起きた。

### Ⅳ考察

「サインズ」では，「見える化」するツールを用い，解決志向によるケースワークを行うため，児童の安全のために何をすれば良いのかが明確になり，当事者の力を引き出し主体的な行動に結びつくと考えられる。無用な対立や長期の膠着状態を避けることで，一時保護や施設入所期間は短縮し，どうすれば児相は関わりを終結できるか，児相と保護者が明確に理解できるようになる。また，児相担当者にとっても，いつ，どのような作業を行うかが分かりやすくなる効果もあると考える。

親から離れて暮らす児童はたとえ虐待による施設入所だったとしても「自分が悪い子だから親に捨てられた」との思いを抱きやすい。「サインズ」の実践で子どもが無用に傷つけられるのを避け，より安全な環境で生活できるようになると考える。

### Ⅴおわりに

これまでは職員各自の取り組みに委ねられてきたが，質の高い虐待対応を「宮城スタンダード」とするためには，良い実践を共有し，児相全体が一丸となって専門性の向上に努めて行くことが急務である。

### Ⅵ引用文献

1）菱川愛，サインズ・オブ・セーフティ・アプローチ[1]，ソーシャルワーク研究.2013；39(1)，p61-70
2）菱川愛，サインズ・オブ・セーフティ・アプローチ[2]，ソーシャルワーク研究.2013；39(2)，p45-53